令和８年度第１次
連合教職大学院
入学試験問題

［高度教職開発専攻］

小論文

注　意

１．問題冊子は、試験開始の合図があるまで開かないこと。

２．解答は、すべて別紙解答用紙の所定欄に記入すること。

３．この問題冊子は、表紙を除いて２枚である。もし不備の場合は、直ちに申し出ること。

４．解答用紙は１枚である。所定欄に、受験番号及び氏名を明確に記入すること。

５．下書用紙は、１枚である。

６．試験終了後、この問題冊子及び下書用紙は、持ち帰ること。

高度教職開発専攻	小論文	令和八年度第一次入学試験問題

問　次の文章を読んで、「個別最適化した学び」に対する筆者の主張を要約しなさい。そのうえで、筆者が危惧する点に対して、どのような教育実践が求められるかについて、あなたの考えを述べなさい。（横書き　八〇〇字以内）

「個別最適化した学び」論

「能力に応じて、ひとしく教育を受ける権利を有する」（日本国憲法第二六条）というとき、気になるのが、最近にわかに流行している「個別最適化した学び」論です。これをどう考えるかというお話をしておきます。

二〇一八年ぐらいから教育行政の議論に登場してきたのが、「個別最適化した学びを実現していく」ということです。びっくりしました。教育学者は、「個性尊重」とか「個を大事にする」といった語は使っても、「個別最適」という言葉をこれまであまり使いませんでした。私は、今でも使うのは嫌です。しかし、それが教育行政の議論で出てきて、いつの間にかだんだん広がっていっています。

そこには三つの系譜があります。第一に、一人ひとりの子どもを大事にしようというリベラルな教育論の発想です。一人ひとりの子どもにちゃんと手を掛けようとしたときに、個別化という話が出てきます。

第二に、自由競争的な教育論です。一人ひとりが自分の好みで選択をするとか、そのうえで競争すればいいという、市場の中で自分で何かを選択していくようなイメージの教育論の系譜があります。

第三に、次章で論じる、ＡＩ技術の発展です。それが教育分野に導入されるようになってきました。コンテンツを形成するとか、アプリを作るという話になって、個別最適化の議論のベースを作っています。

この三つが、個別最適化した学び論を作っている流れになります。そこでは、一人ひとりに合わせたカリキュラムとか、一人ひとりに合わせた教材で個別最適化した学習をさせるというふうに、学校や教育を変えていきましょうという議論になります。

皆さんは、これをどう考えますか。良さそうに見えるかもしれませんが、実は大きな問題があります。一つには、みんなで一緒に共同で学ぶことそれ自体の意義が失われかねないということです。学習の孤立化です。隣に座っている子とまったく別のことを学んでいったとしたら、お互いに学習の中身を介して結びつく契機がありません。子どもたちがバラバラになってしまう、ということになります。きっといろいろな教育学者が、これを気にしていると思います。

私がお話ししたいのは、もう一つの危惧です。どの子も自分の学力に見合った学習ができるということが語られますが、家庭環境の差の影響を増幅させることになります。簡単なモデルで言うと、スタート時点ではわずかな差だったのが、一人ひとりに合わせた教材、カリキュラムを作っていくと、結果的には、ゆっくり進む子どもはゆっくり、速く進む子どもは速くという形でどんどん広がっていくだろうと思うのです。

スタート時点での学力は、家庭環境の差の影響がとても大きいです。小学校に入るまでに既にいろんなものを読んだり、親と一緒に勉強して学んでいる子どもや、小学校に入るまで文字の読み書きに

全く触れなかった子どもなど、家庭環境の差の影響が非常に大きく、それがどんどん増幅していきます。

原理的にどうなるかというと、医療や福祉と比べてみれば、よく分かります。個別最適化というのは、医療の分野で先に議論されていって、それが教育にも持ち込まれました。個別最適化した医療、あるいは個別最適化した介護というのは、究極のゴール（目標）は一つに収斂（しゅうれん）しているものです。

図5-2で言うと、患者の遺伝子や蛋白（たんぱく）などのタイプを調べて、一人ひとりのタイプに合わせた治療の仕方が選択されます。たとえば、個人のDNAの状況に合わせた特別な薬ですね。「遺伝子変異がこのタイプのガンに「効くのはこの薬だ」というふうになります。今まで「○○ガン」と総称されて扱われていたものをもっと細分化して、最適な治療法や最適な薬を見つけ出そうとしているのです。しかし、この場合、疾病（しっぺい）を治療して健康を回復することが、どういう患者であれ、共通のゴールになっています。

福祉も同じです。体が不自由な人、認知症の人など、それぞれ状況が違う中で、それぞれに適した介護の仕方をします。当人の状態や生活の環境によって、ニーズが異なる。それに応じたやり方を採用しようというわけです。しかし、この場合にも、快適で人間らしい生活を誰もが送れるようにするというゴールは共通です。つまり医療や介護は、スタートは違っても、ゴールは一つなのです。

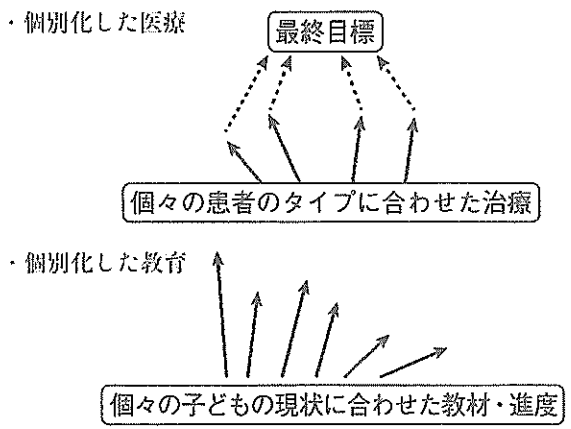

図5-2「個別最適化した学び」論をどう考えるか

ところが、教育の個別最適化は、ゴールが拡散しています。すなわち、個々の子どもがたどり着く先はまちまちなのです。一人ひとりに適した学びの場合には、ずっと行った先に、非常に高度なことを学習して、社会に出ていく子どもと、そうではなくて、本当に初歩的なことを何度も反復学習をして、社会に出ていく子どもがいます。待っている先は、別々の職業世界です。そうすると、ゴールが拡散してしまうわけです。

それゆえ、教育で「個別最適化」を追求していくと、差異化の増大ということ自体が善になります。医療や福祉は、最終的に誰もが共通の目標を実現しようという話になりますが、教育の場合は、別々の学習をして、別々のものを追求する人間になりましょうという話になってしまうのです。

「指導の個別化」と「学習の個性化」を上手に組織した教育実践が、学力の格差を縮小させることに成功している事例はないわけではありません（森　二〇一一）。しかし、これまでの議論をながめるかぎり、学習の個別化によって生じる機会の差に対してどう考えるのかということに対する配慮が、個別最適化した学び論には欠けています。つまり、機会の不平等をシステムで構造的に作り出してしまうことになる。個別分化した学習のシステム自体が、機会の不平等を増幅させて、しかも、それに誰も反論できなくなるという問題をはらんでいます。

（出典）広田照幸　『学校はなぜ退屈で　なぜ大切なのか』（ちくまプリマー新書、二〇二二年）一部改変